

予算と決算の乖離

監事 吉村 誠 (47期)



年度末になると、獲得した予算を年度内に使い切るために、そこかしこで、道路が掘り返されては埋められるという工事を目にします。獲得した予算は年度内に使い切らないと翌年度以降の予算が削られるからと言われていきます（執行率の問題）。ところで、東弁では、各部署が獲得した予算を年度内に消化しきらなくとも、それを理由に、翌年度の予算要求で厳しく査定され、減額されるということは無かったです（過去の執行率については定期総会招集通知記載の一般会計収支計算書の執行率欄参照）。

仮に、各部署で獲得した予算が実際の事業の執行の際に不足すれば、不足分をどこからか持って来なくては事業の執行が困難です。その場合、科目間流用、予備費の支出、補正予算等の手法で不足分の予算を獲得することになりますが、それぞれ新たな手続を踏むことが必要で、補正予算と

なれば総会決議まで必要です。そのような手続上の煩雑さを避けるためでしょうか、「多めに予算申請して予算を獲得し、獲得した予算を完全に消化せずに年度を終えるという手法」が取られてきました。これが、赤字予算に始まり黒字決算に終わる「予算と決算の乖離」であり、歴代の監事が指摘している東弁の予算編成上の問題であり財務上の課題の一つです。

この問題においては、予算の規範性が失われるというのが本質的な問題点ですが、副次的な問題点として一般会計に平成26年度決算の時点で赤字決算にならないと使えない事業活動繰越金が約14億円積み上がっております（一般会計から会館維持管理会計への繰入金の停止措置とリンク）。

本年度の理事者は、この問題の解消にも着手し、現在、予算編成の真っ最中です。

研修情報は時代の波に乗って

監事 鹿野 真美 (53期)



時代は「ペーパーレス」。かつては、東弁、東京三会、日弁連等の開催する研修等の案内はファクシミリで送られてきました。やがて、そうした研修情報は「とうべんいんぷお」という形で冊子にまとめられ、この「LIBRA」と一緒に月に1度配達されるようになりました。そして、2014年12月、冊子による「とうべんいんぷお」の全会員一斉配布は終了し、東弁から会員に対する研修等の情報提供は、メールマガジンによる発信に一本化されました。今、東弁会員の研修等への参加申し込みが激減しているとのこと。

たしかに、全会員一斉ファクシミリ送信や冊子作成発送の手間暇、費用、資源を削減するという方向性に間違いはないでしょう。しかし、ファクシミリで自動的に流れてくれば、手に取って内容をすぐに確認でき、その場で書き込み返信

することで申し込みができるどころ、メルマガ方式では、自分から積極的に獲得しにいかなければ詳しい情報も入手できません。そのひと手間がなかなかかけられないのです。情報が届かず研修を受講しそびれる若手も多いといえます。

若手が研修を受け損なわないよう、ファクシミリ案内を復活させる?! いやいや、時代はさらに進みました。東弁では、スマホに研修情報が自動的に届く機能を持つアプリを開発中です。もちろん、そのシステム構築には費用がかかります。私たち会員の大事な会費の使い道については、厳しく、つまり、無駄遣いを抑える方向で目を光らせるのが監事の役目ですが、「安物買いの銭失い」を推奨することになってもいけません。今回のアプリ開発は直接間接に会員のためになると考えています。